慈光

第六卷　第八號

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和二十九年八月十五日發行（毎月一回・十五日發行）
（通第六五号）

目次

無明長夜の燈炬……花田正夫…(1)
一週忌に義兄を憶ふ……自在丸新十郎…(5)
大経上巻の全体の感じ……福島政雄…(9)
猿王物語……デヤータカ物語…(11)

無明長夜の燈炬

花田正夫

聖徳太子の十七憲法の第七條に『事大と小と無く、人を得て必ず治まり。時急と緩と無く、賢に遇うておのずからゆたかなり』とありますが、人生の種々の問題に生きなづむ者も、賢者に遇ひその徳沢を蒙ると、寒々とこはばつてゐた心が、何時しか温められやはらげられ、暗く沈んだ心も、晴れ〳〵と浮び上り、身の破滅とまで思ひ詰めた事件も、極く平凡な些細事に過ぎなかつたと、大いにうなづかされて、身も心もゆたかにひらけて來るものであります。斯様なことは大なり小なり誰人も経験するところで、賢者の身にそなはる徳風に浴して、心中の煩悩の氷塊が自然にとけて、おのづからゆたかな味を得るのであります。

佛徳巍々と輝く

華厳経の入法界品のはじめに、文殊菩薩の遊行せられる後姿を、舎利弗尊者が驚き拝しながら、

『誰も見よ、誰も仰げ！あの文殊菩薩の歩まれる尊くもけだかい御姿を！

菩薩の行かれるところ、深く道を塞いで繁る棘茨も自然に道を左右にひらき、道の両側によい香のする美しい花が無數に咲き乱れ、嶮しい山道も坦々とした大道に転じて行く。何たる威徳、何たる不思議であらうか！』

と讃へて居ります。華厳経は佛陀の成道の内容を解かれたもので、佛智の無碍の徳が文殊菩薩に象徴せられて居り斯うした言葉によつて佛徳がいよ〳〵開顯されます。

大無量壽経の下卷に、佛は衆生の五悪の相を悲しみ説かれて、その結びのところに、彌勒菩薩に次の有名な言葉を残されて居ります。

『佛の巡錫するところは、国と云ひ、町と云ひ、村や里にいたるまで、何処にもその惠みを被らないものはない。その徳沢の自然として、天下は和順し、日月も清明に、五

風十雨時にかなひ、災禍や疫病もおこらず、国はゆたかにさかえ、民はやすらけくいそしみ、干戈は不用となり、人々は互に徳を尊び仁をおこして、上を敬ひ下をいつくしむといふ風に、秩序整然とした世界が自然に建現せられて來る。

佛の衆生を憐みいつくしむことは、世の親達がわが子をおもふよりも甚しい、云々』

と。斯うした経典を拝読いたしますと、生身の佛陀が眼前に影現せられ、その徳沢に潤ふ不思議な風光が現前して如何にも尊く有難いことであります。

更に涅槃経に見る阿闍世王の救済の顛末、又観無量壽経の有名な韋提希夫人の得道大悟、尚ほ諸経典に見られる佛弟子を始めとして一切の佛徒の帰佛得道の模様を拝読する時、八十年の佛陀の御生涯は、光顔巍々として、威神の極りましまさぬをいよいよ渇仰申すのであります。

生身の佛は滅す

嗟、然し「上は大聖世尊を始め奉り、下は悪逆の提婆にいたるまで、のがれ難きは無常」であります。私共は幸にも人間として地に生れ出ながらも、佛陀の御在世に遇ふことが出來ないことは、何といふ悲しみでありませうか。

伝へ聞きますれば、アシダ仙人は誕生佛の諸相を拝しながらさめ〳〵と泣き悲しむので、淨飯王がそのわけを詰問すると「太子は成人せられてほどなく大聖となられる相をそなへて居られる。然し私の身はすでに老朽、成道の日に遇ふことが出來ません、教を蒙ることが出來ません」とまたしても泣き崩れたとか、佛成道前の悲しみであります。

又八十御入滅の日、サラサウ樹のもとに、静かに入涅槃せられた佛陀を取り囲んで、佛弟子達はもとよりのこと、二十五種の生類が号泣して別離を悲しんで居ります。

後の聖者、親鸞聖人が、御年八十五の春、夢告の和讃を感得せられて起筆された正像末和讃に

釈迦如來かくれまし〳〵て　二千餘年になりたまふ
正像の二時はをはりにき　如来の遺弟悲泣せよ
末法五濁の有情の　行証かなはぬときなれば
釈迦の遺法ことごとく　龍宮にいりたまひにき

と、大聖におくるゝことを切々として悲しんで居られます。そして生身の佛の御入滅後二千餘年の星霜をへだてた時、釈迦の遺法はあれども無きが如く、証り得るものが一

人も無いと云う始末を身をあげていたみかなしみなげいて居られます。その有様といふものは

無明煩悩しげくして　塵数のごとく遍満す
愛憎違順することは　高峯岳山にことならず

と、全く微塵のひかりのない、すくひのない大暗黒の狀態であります。

法然上人の出現と得道

法然上人は、父君の漆時国が夜討をうけられて横死せられる枕頭に「仇を討つな、その道はつきることのない修羅場である。怨をすてて恩讎共に救はるべき大道を求めよ」との遺言をまもつて、若冠十五にして一人の母を作州の里に残して叡山に登られたのであります。斯くて一筋に道を求められて四十三歳、一切経の読破すでに五遍でありました、然しそこに見出されたものは

「法相・三論・天台・華厳・眞言・佛心の諸大乘の宗、遍学し悉く明めるに、入門は異なりと雖も、皆佛性の一理を悟顯すことを明す、所詮は一致なり。

法は深妙なりといへども我が機すべて及び難し。経典を披覧するに、其智もつとも愚なり。行法を修習するに、其心ひるがへつてくらし。

朝々には定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕々には出離の縁の缺けたることを悲歎す。忙々たる恨には渡に船を失ふが如し。矇々たる憂には闇に道を迷ふが如し。

歎きながら如來の教法を習ひ、悲しみながら人師の解釈を学ぶ。黒谷の報恩蔵に入つて一切経を披見することすでに五遍に及びぬ。然れどもなほいまだ出離の要法を悟り得ず、愁情いよ〳〵深く、学意ます〳〵盛んなり」

との無限の悲歎でありました。求めに求められて、得られたのでなく、愚悪の身、如何とも為し能はぬ身を見出されたのであります。佛法を求めて、佛法の器でない身を見出されたのであります。

智目缺け行足を失うた身を照し出された上人は『予が如き頑魯の者』と表白される源信僧都の往生要集に心をひかれ給うて『濁世末代之目足』として淨土の教行をひもとかれ、遂に善導大師の観経の四帖之疏を得られ、愚痴の女草提希こそわれなり、下機十悪の凡夫こそわが姿よと自照されては『十悪愚痴の法然』と名告られて生涯の述懐とされて居り、その浮ぶ瀬のない罪業の身に彌陀佛の本願の大船がまします、そのたすかるべからざる身に南無阿彌陀佛の名号ましますと隨喜渇仰せられたのであります。

廻向の転換

親鸞聖人二十九歳、叡山二十年の修行も空しく、いづれの行も及び難き愚禿の身に、彌陀の五劫思惟の本願を『ひとへに親鸞一人がためなりけり』と、よきひと、六十九歳の法然上人の仰せに聞きひらかれたのであります。

このことは誰人もよく知ることでありますが、今回ことに私の胸を打つことは、両聖人が道を求めに求められて、その挙句に道を得らたのでなく、得ようと苦心惨胆せられた果てに、微塵もどうすることの出來ない、智目行足をとこしなへに缺く身と崩折れられて、そこにその駄目な身を飽くまでも捨てられない広大な佛の本願のまこと、大悲廻向の名号を感得せられたといふ一事であります。

ここに佛教の方向が一転したのであります。所謂『廻向の転換』であります。至心に廻向して下さる名号の故に、老少善悪をえらばず、行住坐臥をへだてず、時節の久近を問ふことなく、農であれ工であれ、商であれ、狩もし、漁もして生計をするまま、おへだてのない南無阿彌陀佛の大悲ひとつで、われらが救済の扉がひらかれ、六合に満つる佛陀の光明が再び地に開顯せられたのであります。その至極のまことが

『ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし』

の一句におさまるのであります。我等はすでに智目なく行足を缺く身、苦海のはてしない沈淪を定めとする身でありますが、この者を知悉された大悲、やむにやまれぬ広大な御眞実が、そのまま金文字となつて進り出られたのがこの聖句であります。

無明長夜の燈炬なり　智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり　罪障おもしと歎かざれ
願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
佛智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず
如來の作願たづぬれば　苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまひて　大悲心をば成就せり

老聖人の慈眼に無限の悲涙を湛え、絶ゆることのない称名念佛裡の讃仰であります。しかもこの和讃の終りに

如來大悲の恩德は　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩德も　骨を碎きても謝すべし

と御恩の程の忝けなさをひたぶるに謝し給うて、世間の弄言を恥ぢ給ふことのない悲心を仰ぐのであります。

『一週忌に義兄を憶ふ』

自在丸新十郎

近角常音師が遷化されて満一年を迎へようとしてゐる。師は姉の夫であつたといふ点で私の義兄であるだけでなく、私を今日宗教生活に導いて下さつた尊い善知識でもあるのである。

私が親しく義兄にお会ひしたのは明治の終で、郷里中津の中学を卒へた年の春であつた。面倒を見て頂いた八高の受験も見事失敗して、そのまゝ東京にでたのであつたが、生憎腸チブスにやられて東大の三浦内科に入院すること約六十日間、その間生死の境を往來するなど、初めての上京であり初入りといふのに随分厄介をおかけしたものである。思ふやうこゝに入院出来たのも常観師夫人の親戚に当る及能博士が医局にをられたので、義兄は私の病勢を心配の余り、毎日かゝさず時には数回も及能博士を医局に訪ねて、容態を根ほり葉ほりきかれるので、氏はとう〳〵參つてしまひ、常観師夫人に、友人の手前もあること故呼び出しは少し遠慮してもらひたいと注意されたさうであつた。こゝにも義兄の性格の一端がうかゞはれる。

それから約一年間、想ひ出多い求道学舎に入れて頂いて予備校に通つたのであるが。竹鼻さんとて義兄の從弟になられる方も同じ頃学舎で厄介になつてゐられた。当時は子供はゐなかつたが、二人の面倒は大変であつたと今から思ふ。

その翌年、お蔭で五高に無事パスして工科を卒へ更に理科に進んだ私は、肺浸潤を患ひ微熱が続いたのであつた。自分は郷里で静養したくてならなかつたが、郷里では病気に対する理解が浅いからとて、どうしても許してくれないで、逗子で静養することになつた。逗子は常観先生が夏になれば一家をつれて避暑に出られるので、夜具その他がちやんと整つてゐるといふことであつた。避暑地のことだから、さぞかし立派な小ざつぱりしたうちであらうと思つたのが、案に相違して半農半漁のうちで、草ぶきの汚い家の一間であつた。おまけに押入には、かたい綿のはいつた木綿の絣のふとんが入つてゐた。このことは夢多き青年時代の私の心をいたく打つたのである。当時の近角家は、既に

こんな家や夜具にふさはしからぬ境遇にあつた筈である。それにこの質素な生活、私はひどく常観先生御夫妻の人格にうたれたのであつた。

義兄は私が肺浸潤といふのに、姉を子供（三女）迄連れさして、いつなほるとも分らぬ私の看護にやつて下さつたのである。たゞの病人でさへ、子供づれでは世話は大変である。ところが一人息子で我儘に育つた私は、恩義を感ずるどころか、東京を離れて逗子で二人になると、けんかはするし、こんな所につれてこられたとて、不平すら並べたて、姉をなやましたものである。だがこんなこともそんなに長くは続かなかつた。あの恐るべき関東大震災が九月一日の正午頃起つたのであつた。震源地に近い逗子では震動は最もひどく、家々は全壊又は半壊で、私達も大きな邸宅の庭園で集團生活をやらされ、それこそ一食一握りの玄米食で数日間辛抱せねばならなかつた。一粒のお米がいかに尊く有り難いかを体験させてもらつたのもこの時であつた。こちらでは東京が全焼全滅と聞いたり、根も葉もない朝鮮人騒動が伝つて、日本刀や竹槍で自警団が組織されたりして、不安な日暮しであつたが、義兄は逗子の消息が心配でならず、これをそばでみかねた学舎の毛利さんは、自転車で当時物騒な国道を走つて逗子に助けに來られ、お互の消息も判つたのであつた。こんなことで私達も無事東京に帰られ、病気は不思議に微熱もとれ、私は再び学業が続けられ、卒業も出來て福岡に就職すらできたのであつた。

ところがまたこゝに大きな問題を起して義兄並に信者の方々に非常な迷惑をおかけしたのであつた。それは私が親戚のために連帯保証してその債務を背負ひ込んだからである。しかも郷里の悪らつな代言に迷はされて、事件が大変むつかしくなり、遂に義兄に相談をもちこんだのであつた。義兄は大変心配されて早速來郷され、事が面倒と見るや、四国高松市で弁護士をされてゐられた酒見先生に來て頂いて相談されるやら、福岡の横倉さん、花巻さん、熊本の堤さんなど多数の方々を煩はすやら、大変なことになつてしまつたのであつた。しかしこの事件も、義兄の一方ならぬ御骨折りと信者の方々の御援助によつて、どうやら家屋敷や多少の田畑を残して頂いて解決したのであつた。

以上は形の上に現れた大きな事件について御尽力下さつた事柄であるが、義兄は私が田舎の中学校を卒業してからこの方大小洩らさず相談に應じられて、適切に教へて下され問題を解決して下さつたのである。私は母の胎内で父を失つたが、父がもし生存して居られても、恐らくそれほど面倒をかけてゐなかつたであらうほど、義兄におかけした面倒や心配は大きかつたのである。義兄は相談されると徹頭徹尾といふか、必死といふか、專心といふか、自分の利

害得失や感情などすべてを離れて、只管問題の核心をつかんで解決され又導いて下さつたのである。義兄に決していゝ加減な相談は持ち出せなかつた。それを知れば性分として必ず徹底的にことを処理するからである。手紙でもいゝ加減な返事を頂いたことがない。あの筆で特徴のある筆勢を以て用紙十五枚二十枚と書いて下さつたのである。そのかき方たるや要点をつかみ、微に入り細に亘つてゐたのであつた。私はまだ義兄以外からこんな手紙を今日迄頂いた経験をもたない。実にめん密な頭脳の持主であつた。事実考へだすと、バットをふかしたり、何杯となく濃い番茶をすゝつたり、休を時折ゆすりながら長い間夢中に考へ込むのであつた。常観先生とは、このやうな色々な点で性格も違つてゐられたが、先生が雑誌求道や建現を出されて、あれだけ全国的に御活動のできたのも、蔭に義兄の大きな力があづかつてゐたと思はれる。

義兄は昼間は來客などで落ちつけないためか、雑誌の原稿や手紙などは大低夜分に書かれたやうで、求道発行時代は徹夜はむしろ普通であつたやうに記憶する。そのため、私など九州辺から夜行列車でろくに眠れないで東京に着いた晩など、話が大変面白いので、つひ〳〵十二時一時になることが多く、こちらは参つてしまつたことがよくあつた。義兄は大変な子煩悩でありまた大変なかんしやくもちでもあつた。子供の体に注意さるゝこと、子供を可愛がることは人一倍であつた。嘗て姉が長女をつれて私の郷里に來られ、別府や福岡をあちこちしてゐる間に、長女は福岡の私宅でチブスを病ひ、九大の武谷内科に入院したのであつた。義兄は驚いて東京からかけつけられたが、病勢は悪化するばかり。昼間は九州地方の信者が、病人見舞や御法話や身の上相談などに來られるので、総てを忘れて專心話しこむのであつたが、夕方になると、病院から姉が帰つて來るのを待ちきれないやうに病狀をたづねられ、もし悪いとなると大目玉が飛び出るし、大きな声が出る。しかしこんな時でも私達には極めてやさしかつたのである。

私が常観先生に初めて御法話をきいたのは明治の末年で中学在学当時郷里中津に來られた時であつた。爾來求道学舎や会館や福岡などで、度々法縁に列席させて頂いたのであるが、義兄も亦時にふれ折に当つて御法話を聞かして下され、殊に信者に御話してゐられる傍で聽聞さして下さることが多かつた。その内容は既に慈光紙上で御照会のあつた通りである。私は大正末年までは、まだ人生がどんなものであるかも深く認識してゐなかつだので、尊い御法話はきゝながらも、吾身に引きあてゝきかず、実は他人事のやうに勿体なくもきゝ流してゐたのであつた。所が結婚し就職して愈々実社会に飛び出してみると、仲々思ふやうに

すべてが運んでくれぬ、環境との調和もうまく行かない。人生は実に矛盾だらけであることに気付いて、こゝに初めて眞に血みどろの求道生活が始つたのである。そして昭和三年初めて眞の信心といふことを心からわからせてもらつたのである。

そのお蔭で人生が始めて明るくなり、人生に生きがひを感じ、御恩といふことをわからせて頂いたのである。私の静養のために、然も感染の恐れもある病人のために、家内に子供まで連れさせて附添はせるなどは、人間並の慈悲心では到底出來ることではないことも分らせて頂いた。その他私に対してなして下さつたことは、一から十迄、これをふり返つてみると、実に寸毫も自分を交へず、私の眞の幸福の爲に総てを犠牲にして考へて下さつたのである。こんなことは、私だけに限つたわけではなく、誰にでも同じ態度で臨まれたやうに私には思はれるのであつて、その行は正しく菩薩の行業であり佛の行業であつて、私はこれに対して両手を合して合掌したい気持である。これが私のいつはらない義兄に対する気持である。

たゞ私が一番自分独りでさみしく思つてゐたことは、義兄が如來の御慎悲に救はれ、御慈悲をよろこんでゐられるのに対して、私は如來の智慧を信じ智慧に救はれて、どうしても御慈悲をよろこぶといふ感じがうすいことであつた。如來は慈悲と智慧の権化であるから、どちらになつても同じことだと一應云ひうるかも知れないが、これを味ふ点になると、どうもぴつたりしないやうである。私を今日迄宗教的に、否すべての方面に教へ導いて下さつた義兄はこの点さぞかし私のため残念に思つてゐられたことであらう。訴訟事件で中津に來て頂いた際に、酒見先生は私をひどくこの点で詰問されたのであつた。私も亦それに対して返答もし説明もしたのであつたが、義兄は傍で双方の言ひ分を静かに聞いてゐられたが、何とも仰せられなかつた。私はそれ以來このことが想ひ出される毎に義兄に対して大変相すまぬことであつたと心の中で懺悔してゐる。私も出來れば同じ信境にゐて、一味の信を味ひよろこびたいのである。だが信仰だけは便宜主義でどうでもなるわけでなく、生死をかけて求めた因縁だけに、私にもどうにもならないのである。さりながら義兄は一度も私に対してとがめだてようともされなかつた。又自分の型にはめこまうともされないで、このかたくな。信仰を許して下さつた。彼を思ひ是を思ふ時、義兄の温味溢るゝ慈悲心と底知れぬ寛容とに、唯々感謝すると共に、何一つ御恩がへしもできないで、反逆から反逆へと徹底した私の忘恩のほど、唯々恐れおのゝく次弟である。

（昭和廿九・七・一日）

大經上卷の全体の感じ

福島政雄

大無量壽經をこちらで段々とお話しさせて頂きましたが実は、私自身が一番得をして居るのであります。お話を申し上げて居りますと、私自身に教をハツキリ解らせて貰ひますし、こゝがこんなことであつたかといふことが、アチラにもコチラにも見出されますので、私自身が有難いのであります。

さて今晩は大經の上卷を今までにずうと通読いたしましたので、その全体を振り返つて、その中心に流れるところの感じといふものを申し述べて見るのも無意義ではなからうかと思ひまして、それをこれからお話し致しませう。

佛のまこと

最初に、一体この大無量壽經は何を主題としての御經でありませうか。これは以前にも申しましたが、さう云ふことを繰り返して考へるのであります。それといふのも、他の經典、たとへば、華厳經は釈尊の成道を主題とし、涅槃は經釈尊の御入滅を主題とした經典であります。ところで大經は何を主題としてありますかと考へますと、これは、佛のまことといふことが主題になつてをります。

華厳經や涅槃經は、どう申しますか、佛陀の世界観、人生観とかいふ風の御心持を私共がうかがふ上に非常にたよりになるので、法華經もさう云ふ趣があります。つまり釈尊がさとりの眼で御覧になつた世界の姿を示して下さる。釈尊の御入滅といふことに関しましても、そこに深い世界を私共にひらかれて、人間の世界といふものは表面だけの浅いものでなく、深いものであると、法華經と涅槃經を通じて教へられるのであります。

大經になりますと、佛のまことそのものを私共につきつけて下さつてあります。佛のまことについて説明して下さるのでなく、私共にヂカに生きたいのちとして触れさせて下さるといふやうな味ひのお經であります。然も佛のまことを釈尊御自身が、御からだ、御こゝろに一杯にあふるゝほど感じておいでになつて、その味ひをお説きになつてゐて、そのまことのいのちを私共にスグ触れさせて下さる。

さう云ふ御經であります。

又大經について非常に有難いと感じますことは、釈尊御自身が久遠のまことの前に帰依なさいまして、久遠のまことを身にあふるゝほどに頂いて居られます御姿が、ハツキリと示されてあります。そこが以前に力をこめて申し上げました『光顔巍々』といふところであります。

世尊が大經を説かれます時、『諸根悅豫　姿色清淨』身体全体かきよらかで、諸根でありますから、眼耳鼻舌等が皆よろこびあふれておいでになり、光顔巍々としたお姿であります。この御姿に私共がふれる、そのお姿が私共の心に入つて参りますと、私共の問題の根本が解決されて來る、さう云ふ大事なところであります。

光顔巍々としたお姿が、釈尊の御心の内面では佛々相念と云ふ境地、過去の諸佛、現在の諸佛、未來の諸佛を念じ合うて居られるお心持でいらつしやるのでありますが、この釈尊を仰ぎますと、光顔巍々たるお姿である、全身にあふるゝまことをハツキリとお示しになつて居られる。そのまことは、釈尊御自身が向ふから頂いてをられるもので、釈尊のおいのちにあふれるまことのいのちとして私共にお示しになつてゐるのであります。

こゝのところが、言語以前、釈尊が口をお開きになる以前、言葉に出されない前に、釈尊と私共との照し合ひが成り立つてゐるのであります。さうした時に、阿難尊者がものを言はれる、釈尊におたづね申し上げると

『如來は無蓋の大悲を以て三界を矜哀す云々』

の有難いお言葉が釈尊から出るのであります。即ち佛陀のまことを言葉に現はし給ふところでありますが、そのやうな阿難尊者のたづねと、釈尊のお答が始まります以前に私共に注がれてゐる久遠のまことといふものが直接に私共に感應せられてゐる、そこを何時も〳〵深く感じますところであります。

大經の中心に佛の久遠のまことが流れて居ります、さういふところから、お經の最初に眼を注ぎますと『我聞如是』といふ阿難尊者の言葉がありますが『我聞く、是の如し』と云ふ中に、広大な佛のまことを、すなほに阿難尊者がうけられた心持を現はされてをります。そこで開卷第一に阿難の声をとほして、佛のまことのひびきをきくのであります。

説聽同位

次に、前に申しました菩薩方の御德をこまやかに述べてありますところで、大經では『説聽同位』といふことになつてをります。釈尊と菩薩方や、舍利弗目蓮と云はれるお弟子方と、皆同じ位にあるものとして釈尊はお説きになつ

てをられます。自分はすぐれてゐて、汝等に与へるといふお説き方でなく、自分と聴衆を一つ位において御自分のお味ひを説いて下さるのであります。そこで私共もお経を頂く者でありますから、大経の会座の何処かの末座に連つて居るのであります、そして説聴同位の御待遇を頂いてゐるのであります。

然し、どう考へましても菩薩方や、目蓮、舍利弗、阿難尊者方と私共が、同じ位に立つてゐるといふことは、私共にはどうも申されさうに思ひません。然し釈尊の御心持から説聴同位とはどういふことかと考へますと、彌陀佛の久遠のまことが、佛や佛弟子方に徹つてゐると同じに、私共をも照し徹して下さるから同位であると申されるのであります。私共には菩薩方の修行はもとよりのこと、弟子方の修行も出来てゐませんが、同位と云つて下さるのは、同じ佛のまことを身にうけて、佛のまことの輝きを私共が感ぜしめられてゐるのであります。そこを譬へますれば、地上に、海や川や山、さうして萬物を太陽が照してゐる、すると山が川になるのではありませんが、山は山、川は川、木は木、草は草であるが、海、山、川、草、木、一切のものみなが、陽の光をうけてゐる、光の輝きをうけてゐるといふ点で、お互が同じ立場にあると云へるのであります。犬ころも自分も陽の光をうけてゐる、そこに犬ころも私も同じである。つまり佛のまことが徹底的に照し徹されるところに説聴同位があるのであります。私共は夫々銘々の立場にあるまんま、菩薩方はおえらい方であり、私共はそれには遠く及ばないが、そのまんま同位にある。これは佛のまことの到らぬ隈もなく、透らぬところもないといふところから味へて來るのであります。

斯様に大経の会座に列する菩薩の徳を讃歎されてゐるところを味ひますと、菩薩は菩薩、凡夫は凡夫でありますが、夫等が同じ佛の光をうけて夫々のかがやきをもつてゐる、かう云ふ味ひか出て参ります。

未　完

ゲエテの語録

⊙外国のものを飜訳する時には「どうしても訳せない」と云ふ処まで行き詰らなければいけない。そこで初めて外国の思想と言語とを體得することが出來る。

○誰でも自分の了解出來ること丈けが耳に入るばかりだ。

○迷信は人間の本性の一部である。其故人が自分の迷信を全く一掃したと思つた時でも、実はどこかの妙な隅つこに隠れて居るので、もう大抵出ても大丈夫と見込みが付く時分に再び首を出して來るものだ。

猿王物語

序　文

佛陀の晩年のことでありました。青年の頃から佛陀とその力量を競ふと云ふ程に優れた素質を持つた提婆であるが、律法的な冷厳な性格に禍されて、佛道に徹し得ないで遂には克服しがたい野望に狂うて、阿闍世を新王とし、自ら新佛となつて全印度を統治しようと企み、あらゆる手段をめぐらしましたけれども、どれも〳〵失敗して了ひました。そこで提婆自ら佛陀をその御巡錫の途上にお待ち伏せ申し、山上から大石を投じたのでありますが、幸にその石は佛陀の御足を僅かに傷つけたばかりでありました。

御弟子達は早速精舍に佛陀をおつれ申し、佛陀の御身をお護り申しながら、口々に提婆の悪逆をのゝしり責めたのであります。

佛陀は斯うした比丘達を前に「心配しなくともよい。地上に佛をさまたげ得る者があり得るであらうか」と説かれ、更に「提婆は悪逆の罪を犯したけれど、提婆がさうなるには、そこに深い業縁といふものがある。そこを想ふとむしろ悪逆の罪を重ねずには居られない提婆を一層憐れに思ふ」と述べられて、自らの罪によつて佛に逆き、自ら悪道に堕して行く者にも無限の大悲の涙を注いで下さる、広大無辺な、不可思議の思召しを、猿王物語として説かれたのであります。

本　文

ヂャータカ物語

その昔、梵与王といふ王様が、ハラナ国を治めて居られました時その国のビシイ村に住む一人の農夫が、畑に出て牛を放したまゝで土地を耕して居りました。牛はしばらくは近くの藪に入つて木の葉や草を食べて居りましたが、何時の間にか、森の奥深くへ逃げこんで了ひました。四辺に牛の姿が見えないのに気づいた農夫は驚いて牛を捜して森の奥に入り、さまよひ〳〵してとう〳〵雪山の山中まで分け入つて了ひました。そして方角も解らなくなり、七日の間食べ物もなくはげしい飢に苦しみながらさまようた挙句に、一本のティンドウカ樹を見つけました。その実は枝もたわゝに熟し、あたりに沢山の実が甘い香を放つて散り落ちて居りました。

農夫は夢中で地上に落ちてゐるのを拾つては食べ、拾つては食べして居りましたが、余りの甘美さに、とう〳〵木によじ登つてそこで食べ始めました。一つを取つて食べる

と又次のをと、飽くことのないむさぼりの果てに、樹上で遂に足を辷らせました。すると枝は斧で切られた様にメリメリと折れ、枝と共に農夫は眞逆様になつて、千尋の山の峡に落ち込んで了ひました。絶壁にはさまれて流れは深く、谷間の岩にしがみついたまゝ、最早生きた心地もなく、満十日の間俯したなりで過しました。

そこへ一匹の猿王がやつて來ました。彼は牛の様な尾があり、近くの洞窟に棲んで居て、毎日枝から枝、樹から樹を飛び廻つて果実を食べて居りましたが、谷底に痩せ衰へて身体の色も黄色になつて倒れてゐる農夫を見付けて、慈悲の心をおこして呼びかけました。

「オヽ、そこに苦しんでゐるのは誰か。人か、魔か、身の上を打ち明けよ」と。そこで農夫は彼を合掌して、

「私は人間です。こゝから脱れることが出來なくて、死を待つばかりの有様です。どうぞ私をたすけて下さい」

と叫びました。

これを聞いた猿王は山中を飛び廻つて重い石を運んで來て足場を設け、苦心惨胆した末に、やつと農夫に近づき、その背を向けて

「サア、私の背にお乗り。そしてしつかりと私の首に摑つておいで。この谷底からすぐに救ひ出してあげよう」

と云ひました。農夫はこの情深い猿王の言葉を聞いて、うれしやとその脊に乗り、その首にすがりつきました。かうして力の強い猿王は彼を脊負うて、危い巖の上を非常な難儀をして、やつとのことで救ひ出しました。然しさすがの猿王もひどく疲れて、草の上に横たはつて農夫に云ひますのに、

「友よ、わしはしばらくの間眠りたい。その間に獅子や虎や豹や熊などの猛獣が油断を見すまして襲うて来るかも知れないから、しばらく見張つてゐて呉れないか」

と。かうして農夫を護りとして猿王は疲れきつた身体をしばし横たへてまどろみました。

嗚呼、この時なのです。獅子や虎よりも、もつと〳〵恐しい心を農夫は起しました。それはかうなのです。

『この猿も、どうせ他の動物と同じ様に人間に征服せられ、殺されて餌食になるのだ。俺は此奴を今殺してその肉を食べよう。そして残りの肉は持つて行かう。家にまでたどりつくには遠い難路を越えて行かねばならぬ。この肉はその路用としよう』

と。そこで石を拾ひ上げて、力の限り彼の頭に打ちつけました。併し猿王を打ち殺すには農夫の体力はあまりに疲れ果て、弱りきつて居りました。

かの猿王は血に塗れて急ぎ立ち上り、その眼に涙を一杯ためながら農夫を見つめて云ひました。

「お前は何といふ浅間しいことをするのか。自分の生命を永らへる為に、俺の生命を奪はうとするのか。

心卑しき人間よ、お前はわしにこの様な険難の断涯から救ひ上げられたのではないが、そのわしを殺さうとは——

みのりを知らぬ者よ、お前の犯した邪悪な罪の報ひとして、お前自身が苦しまねばならぬのに！

この様な心のくらき者に、邪念に狂ふ者に、どうぞ不幸の襲ひかゝることの無いやうに！

さあ、わしが猛獣の危険のない道まで案内してあげやう、そして無事に家に帰れるやうに！」

猿王はこの様にさとして、農夫を人里近くまで導いて行つて、

「こゝからはもはや心配はいらぬ。お前の気の向く道を辿つて行け」

と云ひ残して、自分は溯水で頭の血を洗ひ、涙をぬぐうて奥山に登つて行きました。

農夫はこの自らの逆悪のために、全身熱に苦しめられ、渇いては水を求めて池のほとりに行けば、水は火に焼かれた様に赤血を漂はし、水の滴が身にふりかゝれば、そこに果実の熟したやうな腫物が出來て悪臭を放ち、膿血が流れる様になつて了ひました。

その為にどこへ行つても人々は彼の行く道をさへぎり、杖を手にして追ひ払ふ様になりました。この様な病悩苦痛を受け続けて彼は長い年月を過さなければなりませんでした。これこそ己が罪業のむくひであります。その苦に責められながら農夫は懺悔の涙にぬれて

「人々よ、こゝに集つてゐる限りの人々よ、尊い御法の道を求めて行きなさい。恩人を欺いてはなりませぬ。恩ある人を欺く者は私の様に身は壊れて遂に地獄に沈むのです。猿王こそはかゝる私を矜哀して下さる大菩薩の御姿なのです。それなのに私は欲に盲ひてそれをそれと気づかなかつたのです」

と叫び続けて、膿血を流しながらも、世に大きな光をかゝげて行きました。

結び

この猿王こそ佛陀であり、忘恩の農夫こそ提婆達多であります。佛陀は時に「提婆は知識なり」とも説かれ、又時に提婆に向はれては「王の唾液を喰ふ者」と叱責せられ、法華経ではこの提婆の救済を説かれてゐるのであります。それにつけても嫗捨山の歌を思ひ併せ、桁はづれの大悲を仰ぎ、提婆こそ我身と照し出されます。

奥山に枝折り　枝折るは　誰がためぞ
親の身捨てゝ　帰る　子のため

編集後記

三伏の夏、皆様の御健勝を念じつゝ後記の筆を走らせて居ります。

○

昨年九月からベルリンに留学せられてゐる山田宰さんから七月十三日付で大略次の様な通信を貰ひました。

（物理工学研究所にて。）

ベルリン図書館東洋部門担当の佛教学者オースター氏にあひ、どうして人間はかうも競争しなければ生きられぬのかとか、ソ連が物質主義なら米国も同様であるとか、最後に佛教と基教の差は何処だろうか、ルーテルも矢張り自分は悪人で煉獄より外行き場がないと云つてゐる等のことでした。云々。

五月の花祭、それは近角池山両師が明治三十四・五年頃初めて催されたのが今日も続いてゐるが、それに行き、ロンドンのオースチン師を始めこちらの僧侶の人々に接し、又聴衆の方々から佛教に相当深い関心があるのを感じました。又欧洲の各地に佛教協会があり各種の佛教雑誌も出てゐるのを知りました。大体欧洲の佛教は日本の禅宗と眞宗とチベット佛教の流ださうです。

歎異抄は米国で英訳が出版されて居る様ですが池山先生の独文歎異抄は是非ドイツで出版する様に致したいと思ひます。近角先生の信仰余瀝は難航を続けながら独訳して居ります。

幸にも近頃出来た西ベルリン大学の日本語教授で京大出・滞日十七年のエツカルト氏と知合ひとなり何かと便宜を得られるかと思ひます。同氏の話ではスイスの出版社が日本と支那の古典文学書の大規模な出版計画中とのことであります。

△常音師の一週忌に九工大の自在丸氏から切々胸に迫る原稿を頂きました常観師を兄貴々々と常音師が追慕せられた如く、義兄々々と常音師に信順せられ、そこに今生夢のうちの契りが來世悟りのまへの縁と転ぜられてゐる尊さを拜し一人有難く頂きました。戸畑市中原九州工大官舎に居られます。

△大経上巻全体の感じは「眞実の教を顯さば大経是也」との聖人の眞意を開陳下されたことで一語一句ひかり輝いて心に徹るものがあります。福島先生は九月二・三日と安城と浦郡に出講され、四日の夜一道会館で御話下さる予定であります。東京都世田谷区世田谷町四丁目七二四番地が御住所であります。

聚墨生

慈光 第六巻 第八号 昭和二十九年八月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

昭和二十九年八月十日印刷
昭和二十九年八月十五日発行
毎月一回十五日発行
一部 十七円（郵税共）
定価 半年 百円（郵税共）
一年分 二百円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 奥川正生
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千種印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所 慈光社
振替口座 名古屋一〇四七〇番